様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　4 月　30 日現在

機関番号：37104
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008 年～2010 年
課題番号：20791741
研究課題名（和文）　救急医療における家族の意思決定を支援する看護介入モデルの開発
研究課題名（英文）Development of a Nursing Intervention Model to Support the Proxy Decision-making for Families choosing Emergency Care
研究代表者
平原　直子（HIRAHARA　NAOKO）
久留米大学・医学部・助教
研究者番号：80382399

研究成果の概要（和文）：本研究は、救急医療の現場で家族がおこなう意思決定を支える看護介入モデルの開発を目的としている。最初に救命救急センターの看護師３名に対してフォーカスグループインタビューを行った。さらに救命救急センター看護師 10 名に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析を行った。救命救急センター看護師による家族の意思決定の支援は、6 つの場面・状況での看護師の役割が抽出された。また、研究結果をもとに救急医療における家族の意思決定を支援する看護介入モデル案を作成した。今後は、救急救命センターの他職種との関係性も考慮し、モデルへと改善していく必要がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was development of a nursing intervention model to support the proxy decision-making for families choosing emergency care. At the first attempt the interviewed focus group included three emergency nurses. In another attempt ten emergency nurses were interviewed using a semi-structured format. Data was analyzed by means of qualitative induction. The results were classified into 6 situations and their corresponding nursing interventions. I have developed a nursing intervention model based on results of this research. It is necessary to contemplate the relations between the other emergency care members and the nurses to broaden the model.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：意思決定,救急看護,家族看護

Ⅰ．研究開始当初の背景

1.救急医療の場で意思決定能力のない患者の治療・ケアの方針の決定

救急医療の発展により、多くの救急疾患患者の救命・治療が可能となってきているが、その半面延命措置を中止することが妥当と思われる場合で治療が中止されずに患者が安らかな死を迎えられない事例もある。そのような状況から救急医療における終末期の治療決定に対する問題提起がされ、平成 19 年には日本救急医学会から終末期の判断と延命措置の中止の基準を示した「救急医療における終末期医療に関するガイドライン」が出された。患者の意識が清明でない場合、家族は手術や治療に関する説明を聞き、患者の代弁者として早急な意思決定を求められる。しかし、患者の受傷は家族にとっても予期せぬ事態であり精神的に不安定な状態に陥っていることが予想できる。そのような状態の家族に重要な意思決定を求めるには、医療者が支援体制を整えて関わりを持つことが必要と考えられるが、現在のガイドラインには家族への説明手順や治療の選択をおこなう際の家族支援方法は示されていない。

2.意思決定をする家族への支援方法

家族の意志決定を支援する方法として、長戸ら(2001)によって家族の合意形成に向けての介入方法の開発が行われている。この介入方法は、看護師が家族の状況を判断し、いくつかの看護技術を組み合わせて介入するというものであり、様々な領域で使用可能な方法だと考えられるが、救急医療の現場での使用の有用性については検証されていない。既存の救急重症患者家族への看護実践についての研究報告では、家族の相談や社会的支援に関する情報提供が実践できていないことが指摘されている。

以上のことより、救急医療の現場では家族が治療や処置の選択に関する意思決定をおこなうための支援方法が確立されているとは言えない。

Ⅱ．研究の目的

今回の研究では、看護実践の経験が豊富な看護師が意思決定の必要な家族に対してどのような看護を行っているかを明らかにすることで、救急医療の現場で家族の意思決定を支援する看護介入への示唆を得ることを目的とする。

Ⅲ．研究の方法

1.概念図の作成

これまでに本研究課題に関連する既存文献より文献検討をおこない、救急医療の現場で家族の意思決定を支援する看護介入を概念図として示す。

2.フォーカスグループインタビュー

1)内容

救命救急の現場で家族の意思決定を支援する上での課題、および工夫して取り組んでいることを明らかにする

2)データ収集時期　平成 21 年 1 月

3)対象者　高度救急救命センターに勤務する看護師 3 名

3.半構成的インタビュー

1)内容

救命救急の現場でおこなっている家族の意思決定の支援内容、方法、課題を明らかにす

る

2)データ収集時期　平成 21 年 9 月～平成 23 年 2 月

3)対象者　高度救急救命センターに勤務する看護師　10 名

4. 分析方法

1) 逐語録として文書化したデータを質的帰納的に分析を行った。

(1)家族の意思決定支援に関連する内容（家族への情緒的支援、家族との信頼関係の構築方法、インフォームド・コンセントにおける看護職が果たしている役割など）を抽出し、意味内容をまとめてコード化した。

(2)意味内容の類似するもの同士を組み合わせて、カテゴイライズした。

(3)抽出したカテゴリーの妥当性を高めるため質的研究に精通した研究者の指導を受けた。

5. モデル作成

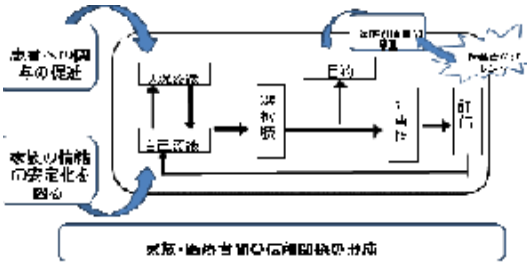
フォーカスグループインタビューおよび半構成インタビューで得られた結果をもとに看護介入モデルを作成。

Ⅳ. 倫理的配慮

1. 対象者に、研究の目的と方法、および次の事項について口頭と文書で説明する。また、研究への協力の同意は同意書への署名をもって得る。
2. インタビューは、プライバシーが確保できる場所で行う。
3. データは、研究以外には使用せず、研究期間中は鍵のかかる場所で保管し、研究の終了と同時に適切に処分する。
4. 研究の結果を個人・施設の匿名性を確保した状態で雑誌、学会等へ公表する。

Ⅴ. 研究成果

1. 救急医療の現場で患者の家族の意思決定を支援する看護介入の概念図



2. 家族の意思決定への看護

1)家族の意思決定への看護場面

①救命救急センター搬送時の対応
②患者への最初の面会時
③検査や手術の前後の説明時
④検査や手術実施の間の待機時
⑤症状の変化時
⑥その他

2)家族の意思決定を支援するためのコミュニケーション方法

①家族を理解する
②家族の欲求に応える
③正しく伝える

Ⅴ. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

６．研究組織

(1)研究代表者

平原　直子（HIRAHARA　NAOKO）

久留米大学・医学部・助教

研究者番号：80382399

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：